

「琉球新報」は「平和のうた」と題して毎週日曜日の朝刊一面に、俳句、短歌、川柳と沖縄の短歌「琉歌」を紹介している。「東京新聞」の「平和の俳句 戦後71年」に「琉球新報」で紹介された「平和のうた」を転載している。

「咲き続く桜の下に不発弾 安慶名(あげな)涼也(11歳)」戦後70年経っても、まだ不発弾がある。11歳の少年が、地上では桜が綺麗に咲いているが、その下には不発弾があると怯えている。岡部伊都子氏が『沖縄の骨』を著している。沖縄の地下には不発弾だけでなく、戦死した方々の骨も埋まっている。生きることを断たれ、恐怖の中で、土に埋められた人々の願いは「平和」しかないであろう。『沖縄の骨』は1997年に出版された本であるが、「今、沖縄全体が基地の問題で闘っているのと同じような闘いである。外国の武器はいらないよ、演習も人殺しもするなよ、軍事基地もいらないよと拒否し続けている人間的な拒否である」と書いている。19年経った今も、激しい基地反対闘争を続けている。本土の人間は沖縄の痛みをどのように受け止めるのかと突きつけ、問われている。

「爆音のずしりと響く寒夜かな 新崎春海(65歳)」沖縄に行った時、嘉手納基地が見える所に行った。戦闘機が「タッチ アンド ゴー」の訓練をしていた。物凄い爆音である。会話が中断され、テレビも聞こえなくなる日常である。耳を押さえて、転げまわる子どももあると聞く。岳父の大和市にある家にしばらく住んだことがある。ある夜、厚木基地の爆音で目覚めた。厚木爆音訴訟で、自衛隊の夜間飛行には制限をつけたが、米軍の飛行に関しては制限なしという判決であった。米軍にフリーハンドを与えている日本は国民不在ということにならないか。

「洞窟(がま)深き病院跡やすみれ咲く 伊野波清子(82歳)」私もいくつかのガマを訪ねた。暗く、湿っぽく、とても長期間、過ごせるような所ではない。泣く子を黙らせるために窒息死させた、住民は日本兵に追い出され、砲撃に晒されたという話を聞く。ガマは修羅場であった。読谷村のチビチリガマは集団自決が起こった悲劇のガマである。中には入れなかったが、説明を聞いて戦慄した。私の友人は、その近くのガマに隠れていたが、ガマにはハワイで生活した人がいて、米軍は無益な虐殺はしないと説得され、自決せず、降伏して助かった。彼は沖縄の教会のために懸命に働いてきた。日本兵が中国でした残虐行為を米軍からも受けるという噂が、沖縄の悲劇を増幅したことは確かであろう。

「平和の俳句 戦後71年」の「一句に込めた体験・思い」から。「歩は前へ辺野古の浜にカニの群れ 藤井加代(67歳)」藤井氏は辺野古の海を訪ねた。ミナミコメツキガニの群れが砂の中に潜ったり、沖に向かって進んだりする光景を見た。それが、沖縄県民の絶えることのない平和への思いと重なり、熱いものが込み上げてきたと言う。私たちが辺野古に行った時、説明する人から「あなた方百田さんのお友だち」と言われ、ショックを受けた。百田氏は、沖縄県民の声を代弁する「沖縄タイムス」と「琉球新報」を潰せと言った人である。沖縄から見れば、辺野古に来る人もしよせん百田氏の友だちにしか見えないということで、彼らの本土への不信と怒りを受け止めた。

「平和の俳句 戦後71年」の「記者の『一句』」から。「春浅し美(ちゅ)ら海守る人の群れ 谷関幸子(61歳)」キャンプ・シュワブの前には、テントが立ち並び、工事反対の声を上げ続けている人々が大勢いる。私たちはほんの数時間しか立ち寄れなかったが、彼らの忍耐と持続力には敬服する。政府と沖縄が「和解」して、工事は止まっているが、今後の経過を注視していきたい。辺野古に基地を作らせてはならない。